

教員が有する学位及び業績に関すること

氏 名	職 名	学 歴	専門分野	学 位
番匠 健一	准教授	大学院 (博)	社会学	博士 (学術)

役割分担

図書委員会

社会における貢献

立命館大学国際平和ミュージアム研究委員会

研究業績

1. 著書

著 書 名	発 行 所 名	発行年月	単著共著の別
1. 戦後史再考	平凡社	2014年10月	共著
2. 日本帝国における植民理論の思想史研究：北海道帝国大学の植民学講座と「内国植民論」を中心に	博士論文	2014年3月	単著

2. 論文

論 文 名	発表機関名(雑誌名) 巻号, ページ	発表年月	著 者
1. 上海における都市空間の形成	『グローバル化の過程において一国民国家を越境する公共圏の諸相——「植民地」と「都市」を軸とする比較歴史社会学的研究』研究成果報告書、pp. 185-187	2007年3月	単著
2. 韓国の移民政策と安山市における「多文化共生」	『帝国の法的形成に関する比較歴史社会学研究：「日本帝国」の「内国植民地」を中心に』研究成果報告書、pp. 150-159	2009年3月	単著
3. 川崎の「多文化共生」と在日朝鮮人の運動の現在	『帝国の法的形成に関する比較歴史社会学研究：「日本帝国」の「内国植民地」を中心に』研究成果報告書、pp. 186-191	2009年3月	単著
4. 1910年代の内務官僚と国民統合の構想——田澤義鋪の青年論を中心に【査読あり】	『コア・エシックス』6号、立命館大学先端総合学術研究科、pp. 361-374	2010年3月	単著
5. 「多文化主義」コミュニティと文化翻訳——川崎市と韓国安山市の事例	『生存学研究センター報告15日本における翻訳学の行方』生存学研究センター、pp. 178-174	2010年12月	共著
6. 北大植民学における内国植民論と社会政策論——高岡熊雄のドイツ内国植民研究の再検討【査読あり】	『コア・エシックス』8号、立命館大学先端総合学術研究科、pp. 351-361	2012年3月	単著
7. 佐藤昌介の北海道植民論と札幌農学校	『アリーナ』16号、風媒社p. 233-241	2013年12月	単著

8. 日本帝国における植民理論の思想史研究——北海道帝国大学の植民学講座と「内国植民論」を中心に——	博士課程学位論文立命館大学pp. 1-154	2014年9月	単著
9. 映画『家族』から見た高度経済成長	『戦後史再考』平凡社pp. 182-199	2014年10月	単著
10. 『家族』から『遥かなる山の呼び声』へ——山田洋次監督作品における引揚げ経験ともう一つの「戦後」の可能性【査読あり】	『文化／批評』6号、国際日本学研究会、pp. 34-63	2014年12月	単著
11. 「廃墟」としての大学で生きること—国家イデオロギー装置と脱出の回路—【査読あり】	『国際言語文化研究』27巻1号、立命館大学言語文化研究所、pp. 65-76	2015年10月	単著
12. 災害難民とコロニアリズムの交錯：十津川村の北海道移住の記憶と語り【査読あり】	『国際言語文化研究』29巻2号、立命館大学言語文化研究所、pp. 117-132	2017年10月	単著
13. 日本統治期台湾における「植民論」と「植民地近代」——後藤新平と高岡熊雄の関係に着目して	『東アジアにおける知の交流—越境・記憶・共生—』国立台湾大学出版中心、pp. 137-160	2018年5月	単著
14. 酪農のユートピアと地域社会の軍事化—根釧パイロットファームの再編と北海道・矢臼別軍事演習場の誘致—【査読あり】	『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』20号、立命館大学国際平和ミュージアム、pp. 135-149	2019年3月	単著
15. 佐藤昌介の植民学講座	北大ACMプロジェクト『北海道大学もう一つのキャンパスマップ』寿郎社、pp. 60-66	2019年6月	単著
16. 「ハンパク 1969—反戦のための万国博—」展示について【査読あり】	『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』21号立命館大学国際平和ミュージアムpp. 83-96 1章調査研究、3章展示内容を執筆した。	2020年3月	共著
17. 関西ベ平連の活動と「ハンパク（反戦のための万国博）」	『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』21号立命館大学国際平和ミュージアムpp. 97-118	2020年3月	共著
18. 境界領域における「移民」と「植民」——近現代北海道史からの視点【査読あり】	『移民研究年報』24号、日本移民学会、pp. 29-37	2020年6月	単著
19. 入植と離散の文学サークル運動——境界地域としての北海道東部	『生存学研究』4号、立命館大学生存学研究所	2020年7月	単著
20. ファントム墜落からハンパク（反戦のための万国博）へ——江藤俊一氏に聞く	『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』22号、立命館大学国際平和ミュージアム	2021年3月	共著
21. 反基地運動の経験とピースデポ	『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』22号、立命館大学国際平和ミュージアム	2021年3月	共著

3. 学会発表

論 文 名	発表学会等の名称	開催年月 (開催場所)	発表者等
1. 多文化共生と移民労働——安山市と川崎市の現地調査より	International Conference Multiculturalism and Social Justice Democracy and Globalization、Ritsumeikan Un	2009年3月	共

	iversity		
2. 多文化主義言説と<新>植民地主義	inter-asia cultural typhoon in Tokyo, 2009, 東京外国語大学	2009年7月	単
3. 「「多文化主義」コミュニティの文化翻訳——川崎市と韓国安山市の事例」	Translation Studies in the Japanese Context, Ritsumeikan University	2010年1月	共
4. Colonial linkage from the viewpoint of agricultural colonization theory in Hokkaido	British Association for Japan Studies Conference 2012, University of East Anglia	2012年9月	単
5. 山田洋次作品における戦後北海道——『家族』とその後	国際日本学研究会、南山大学	2014年8月	単
6. 鐘楼の行方—永井隆『長崎の鐘』から考える核と平和	カルチュラル・タイフーン2015、大阪人権博物館（リバティ大阪）	2015年6月	単
7. 北海道帝大植民学の思想的検討——高岡熊雄における内国植民論と「社会」	社会思想史学会、関西大学	2015年11月	単
8. 災害難民とコロニアニズムの交錯：十津川村の北海道への移動の記憶と語り	国際コンファレンス「カタストロフィと正義」：移民／難民とカタストロフィ	2016年3月	単
9. 日本統治期台湾における「植民論」とSettler Colonialism:後藤新平と高岡熊雄の関係に着目して	第6回日台アジア未来フォーラム「東アジアにおける知の交流—越境、記憶、共存—」、台湾文藻大学	2016年5月	単
10. Settler Colonizationに関わる日本・ドイツ・植民地期台湾の知的連関——東郷実と高岡熊雄のドイツ内国植民研究	「<日本文学・言語・文化>国際研究論壇：知與體驗」、台湾文藻大学	2017年6月	単
11. 酪農のユートピアと地域社会の軍事化：根釧パイロットファームの再編と北海道・矢臼別軍事演習場の誘致	日中韓農業史学会、ソウル大学	2018年9月	単
12. 境界地域における「生」の問い：北海道別海町における軍事演習場化と酪農開発プロジェクト	「マイノリティ・アーカイブズの構築・研究・発信」、立命館大学	2018年12月	単（パネル発表）
13. 「移民」「植民」の結節点としての近代北海道：高岡熊雄の植民学研究的検討から	日本移民学会、天理大学	2019年6月	単
14. 境界領域における酪農開発と軍事基地化：北海道東部の矢臼別演習場の誘致過程に着目して	日本社会学会、東京女子大学	2019年10月	単
15. 入植と離散と文学サークル運動——境界地域としての北海道東部	国際シンポジウム「共有できない平和／争いが移動する」International Symposium “Unshareable Peace(s) / Conflicts in Motion、立命館大学	2019年11月	単
16. 根釧パイロットファームの戦後史——地域社会と酪農経営の関わりから——	政治経済学・経済史学会、東北大学	2020年1月	単

4. その他

著書名	出版社、著者名	発行年月	総ページ数
1. 「国内植民地」をめぐる調査報告——アイルランド	『生存学』4巻、生活書院、p. 242-244	2011年	

2. 「植民学」研究から「開拓文化」研究へ (1-36)	『月刊新根室』454号～491号、総合企画	2017年5月～ 2020年5月	
3. 「植民」の思想と境界地域としての北海道近現代から見る地平	『知と実践のブリコラージュ——生存をめぐる研究の現場』晃洋書房	2020年3月	